『フランク史書』*Liber Historiae Francorum*（訳注）

橋　本　龍　幸

訳者序文

メロヴィング時代のガリアについて書かれた記述史料は，つぎの3史料，すなわちトゥールの司教グレゴリウスの『歴史十巻』*Historiarum Libri Decem*，フレデガリウスの『年代記』*Chronica*（補充版 *Continuationes* を含む），それにここで訳出を試みる著者不詳の『フランク史書』*Liber Historiae Francorum* しか存在しない。これらの貴重な史料の存在により，われわれは西ローマ帝国滅亡後の不透明な時代におけるガリアの歴史をおおむね把握することができるのである。

これらの記述史料のうち，グレゴリウスの『歴史十巻』は，われわれに最も詳細な情報を提供してくれる。それは形式上，天地創造から始まる年代記であるが，実質的にはほとんどフランク族に関わる歴史であり，メロヴィング史を知るための不可欠な基本史料である。この史料がなければ，メロヴィング時代については，われわれはほとんど何も語ることができないと言っても過言ではない。しかし，残念なことにグレゴリウスの記述は6世紀末で終っている(1)。

7世紀半ばに書かれたフレデガリウスの『年代記』は，全Ⅳ巻のうち第Ⅲ・Ⅳ巻がメロヴィング史を扱っている。このうち第Ⅲ巻は言わばグレゴリウスの記述の圧縮版であるが，6世紀末～7世紀前半を扱う第Ⅳ巻は，グレゴリウスに比べてラテン語や文体，内容などが著しく見劣りするものの，「グレゴリウス後」のほとんど唯一の政治関係史料として有用である。また複数の著者によって8世紀に継起的に追加された補充版は，当該期の出来事をカロリング的視点から記述した史料として注目される(2)。

『フランク史書』はフランク族の起源からテウデリック4世の治世6年目（727年）までを扱う53の章により構成されている。この書も初期の記述はほとんどグレゴリウスの『歴史十巻』の要約にすぎず，またラテン語や文体，内容なども凡庸であるが，フレデガリウスの執筆が終り，かつ著者が同時代の証人として直接見聞した7世紀後半～8世紀初期ごろの記述，具体的にはダゴベルト1世王の死（638年）からテウデリック4世治世の6年目――実質は同王の即位（721年）――までを扱う43章～53章は，著者のほぼ同時代史であり，後期メロヴィング史の情報を提供してくれる貴重な史料であ

る[3]。

先述の通り，『フランク史書』の著者は不詳であるが，われわれはその記述内容から彼の出身地や人物像などについてある程度のことは推察できる。

まず，著者はパリ周辺地域で育ったネウストリア人であったと思われる。彼は，フランク3分王国のうち，アウストラシアやブルグンディア（ブルグンド）で起こった出来事にはほとんど言及しないが，ネウストリアについてはパリ地方を中心に王家や聖職者あるいは政治的出来事について詳述している。それらの記述のなかでも，つぎの2点は注目に値する。まず第1点は彼がサン・ヴァンサン修道院やサン・ドニ修道院に特別な注意を払っている点であり，第2点は彼がテウデリック3世治世（673，676〜690年頃）[4]の宮廷内外の政治活動，陰謀，宮宰などについてかなり詳細な記述を残している点である。第1点は著者がこれらの修道院に関係していた人物であったことを示唆し[5]，また第2点は著者が一時期，テウデリック3世の側近のひとりではなかったかと推測させる[6]。

こうした著者の経歴は彼の作品のなかにひとつの「偏見」を生み出した。それは「ネウストリアびいき」とでも呼びうるものである。彼はネウストリア王家には好意的で忠誠心を示しているが，他の分王国の王家については多くを語らず批判的な説明を加えている。メロヴィング史を代表する2人の王妃でありライバルであったネウストリア王妃フレデグンドとアウストラシア王妃ブルンヒルドに関する記述は，この点を明瞭に表示している。トゥールのグレゴリウスとは対照的に，彼は前者の悪行を時として弁明し，後者の行動を厳しく批判している[7]。また，彼はネウストリアを「フランキア」と見なし，ネウストリア人を「フランク人」と呼ぶが，民族学的にフランク人と呼ぶに値するアウストラシアの住民は「フランク人」ではなく，「アウストラシア人」あるいは「リプアリア人」と呼んでいる[8]。

これらの点を総合して判断すると，著者は青年時代にサン・ヴァンサン修道院で教育を受け，テウデリック3世に仕えたのち，サン・ドニ修道院に退いて執筆活動をした修道士であり，ネウストリアの政治的中枢近くにいた間にこの王家への忠誠心を深め，ネウストリア中心のフランク族の歴史を記述したのではないかと推察される[9]。

『フランク史書』はメロヴィング王朝とカロリング王朝の転換期に書かれた史料である。セーヌ川・オワーズ川流域の支配者がモーゼル川・マース川流域の支配者に押され，前者が「無為王」rois faineants化する時代，それに伴ってフランクの教会や文化も新しい方向に傾斜していく時代に執筆された書である。にもかかわらず，この書は，アウストラシア時代の到来を予感させる空気のなかでネウストリア側の視点に立ち，カロリング家系の台頭に注目しつつも[10]，あくまでメロヴィング王権が永続的な王権であるかのように描かれている。それゆえ，『フランク史書』を利用する場合，われわれはこの点を冷静かつ慎重に吟味して取り扱う必要があるが，この転換期の諸相に迫り理解

しようとする場合，むしろ，そうした著者の価値観，意識，偏見などに注目し吟味してみる必要があろう。そこからわれわれは，幾分でも，メロヴィング王朝衰退期，カロリング王朝成立前夜ごろのネウストリア王権側の実相や，パリおよびその周辺地域の政治的風土を読み取ることができるはずである。そのことは，また，王朝交代後に執筆されたメロヴィング王朝関係の記述，つまりカロリング王朝を輝かせようとするような底意をもって書かれたメロヴィング王朝関係の記述をも見直す一契機となるはずである。

*

ここで試みる『フランク史書』の訳出は，第42章から第53章まで，具体的にはメロヴィング王朝最後の著名な王ダゴベルト1世の即位からテウデリック4世治世までの期間に限定した。これらの諸章，ことに第43章以降の内容は，先述のように著者が同時代の証人として直接見聞した，史料としての価値の高い記述と考えられるからである。ただし，第1章のフランク族の起源に関する記述は掲載し訳出した。

翻訳に際して，底本としては，*Liber Historiae Francorum*, ed., B. Krusch, *MGH*, *SRM*, t. II, Hannover, 1888, pp. 215–323を用いた。訳書としては，B. S. Bachrach (ed. et tr.) *Liber Historiae Francorum*, Lawrence, Kansas, 1973，および部分訳であるが，H. Haupter, *Quellen zur Geschichte des 7. und 8. Jahrhundrts*, *Augewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters* 4a, Darmstadt, 1982, pp. 338–379 (cap. 1–7, 35–53), R. A. Gerberding, *The Rise of the Carolingians and the Liber Historiae Francorum*, Oxford, 1987, pp. 173–181 (cap. 1–4, 43–53), P. Fouracre, R. A. Gerberding, *Late Merovingian France*, *History and Hagiography*, *640–720*, Manchester, NY, 1996, pp. 87–96 (cap. 43–53) を参照した。

なお，各章の章題は原典では最初にまとめて記されているが，拙訳ではわかりやすくするために各章のはじめに記載した。また，拙訳では上記底本をハオプターの編纂したテキストと対照させた上で吟味し掲載して対訳形式をとったが，煩雑さを避けるために掲載は本文のみにとどめ，写本による用語の違いや編者クルシュの註釈などはすべて省略した。それらは，必要な場合，訳文および訳者註欄で配慮した。なお，また，人名はできるだけ一般的に用いられている表記を使用した。

（1） Gregorius episcopus Turonensis, *Historiarum Libri Decem* (*Historia Francorum*), eds. B. Krusch et al., in *MGH*, *SRM*, t. I, ps. 1, fasc. 1–3, Hannover, 1884–1885, 1937–1951[2]. グレゴリウスは591年夏ごろまでの出来事を記述したのち，死期を察してか，纏めを書くことに努め，そののち筆を置いたと思われる。彼は594年11月ごろに没している。

（2） Fredegarius scolasticus, *Chronica*, ed. B. Krusch, in *MGH*, *SRM*, t. II, Hannover, 1888, 1956[2]. この作品の作者は名前不詳であるが，後世に「フレデガリウス」と呼ばれるようになった。彼はブルグンディア（またはメッス周辺）出身のフランク人と考えられる。最後の第Ⅳ巻は584～642年ごろを扱っている。補充版はそれぞれの著者により734年，751年，768年ごろに執筆されている。それらは「カロリング家の出来事の最初の公式記録」と言われる。最初の

補充版（Fredeg., *Cont.* 1–10）は実質的には721年ごろまでの出来事を扱う『フランク史書』の記述に基づいており，僅かな変更しか認められないが，その修正箇所はきわめて興味深い。それらはアウストラシアおよびカロリング的な観点から書き改められているからである。vid. J. M. Wallace-Hadrill (ed.), *The Fourth Book of the Chronicle of Fredegar with its Continuations*, London, 1960, pp. ix–xiv. O. Devillers, J. Meyers, *Frédégare, Chronique des temps mérovingiens*, Turnhout, 2001, Introduction, pp. 5–53. P. Fouracre et al., *op. cit.*,（本序文内掲載）, p. 27. W. Goffart, The Fredegar Problem Reconsidered, in *Speculum*, t. 38 (1963), pp. 206–241. J. R. Strayer (ed.), *Dictionary of the Medieval Ages*, vol. 5, NY, 1985, p. 212. Y. Hen, *Culture and Religion in Merovingian Gaul, AD. 481–751*, Leiden, NY, Köln, 1995, p. 4.

（3）『フランク史書』*Liber Historiae Francorum*（以下 *LHF* と略記）の原典については，上記本文中に記載。この作品は「グレゴリウス後」の記述として，その後長く中世末まで歴史編纂者たちによって利用され多数の写本が出たために，やがて *Gesta regnum Francorum* とも呼ばれるようになる。彼のラテン語も，グレゴリウスに比べると，文体や内容も含めて全体的に劣っており，この時代の一般的な学術の衰退をはっきりと反映している。vid. F. Brunhölzl, H. Rochais, *Histoire de la littérature latine du moyen âge*, t. I–1, Louvain, 1990, pp. 138–139.

（4）テウデリック3世の統治年については第45章訳註(3)(5)を参照のこと。

（5）B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 12. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 146–172.

（6）B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 12. (ex. *LHF*, cap. 44, 45, 47, 49, 50). 彼はテウデリック王への忠誠心が強く，通常は記載されないような王の息子や妻，父母や兄弟の名前も記載し，彼の王国のヴィラについても特別な知識をもっている。彼はまたこの王の息子キルデベルト3世の即位や死に関する記述のなかで最大級の賛辞を述べている。彼はキルデベルトの王子時代の教育係であった可能性もある。ただし，ゲルベルディングはこの王に対する著者の賛辞を私的でなく公的な評価として認識しようとしている。R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 113–114.

（7）B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 10. (ex. *LHF*, cap. 35–40).

（8）B. S. Bachrach, *op. cit.*, pp. 10–11. (ex. *LHF*, cap. 36, 38, 40, 43–). 第43章訳註(3)参照。

（9）『フランク史書』では，690年後に情報が少なくなる。それはテウデリック3世没後に彼が宮廷を去ったためと考えられる。vid. B. S. Bachrach, *op. cit.*, pp. 16–17. なお，ブリュンヘルツルは著者が726年～727年ごろにランまたはソワソン地域で書いたと推測している。また，ネルソンは著者がソワソンのノートルダム出身の修道女であった可能性を示唆している。vid. F. Brunhölzl et al., *op. cit.*, p. 138. J. Nelson, Gender and Genre in Women Historians of the Early Middle Ages, in, J.-P. Genet (ed.), *L'historiolographie médiévale en Europe*, Paris, 1991, pp. 161–162.

（10）この点については第48章訳註(4)および第53章を参照のこと。

INCIPUNT CAPITULA LIBRI HISTRIAE FRANCORUM

1　De origine ac gesta Francorum vel eorum frequenta certamina.

Principium regum Francorum eorumque origine vel gentium illarum ac gesta proferamus. Est autem in Asia opidum Troianorum, ubi est civitas, quae Illium dicitur, ubi regnavit Aeneas. Gens illa fortis et valida, viri bellatores atque rebelles nimis, inquieta certamina obiurgantes, per gyrum finitima debellantes. Surrexerunt autem reges Grecorum adversus Aeneam cum multo

exercitu pugnaveruntque contra eum cum cede magna, corruitque illic multum populus Troianorum. Fugiit itaque Aeneas et reclusit se in civitate Illium, pugnaveruntque adversus hanc civitatem annis decim. Ipsa enim civitate subacta, fugiit Aeneas tyrannus in Italia locare gentes ad pugnandum. Alii quoque ex principibus, Priamus videlicet et Antenor, cum reliquo exercitu Troianorum duodecim milia intrantes in navibus, abscesserunt et venerunt usque ripas Tanais fluminis. Ingressi Meotidas paludes navigantes, pervenerunt intra terminos Pannoniarum iuxta Meotidas paludes et coeperunt aedificare civitatem ob memoriale eorum appellaveruntque eam Sicambriam; habitaveruntque illic annis multis creveruntque in gentem magnam.

『フランク史書』の諸章が始まる。

1　フランク族の起源や行動，度重なる戦いについて。

フランク族の王たちのおこりや素性，この民族の起源や行動について語ることにしよう。アジアにトロイア人の都市があった。その都市はイリウム(1)と呼ばれ，アエネアス(2)が治めていた。トロイア人は強くて勇敢な民族であり，男たちは好戦的で手に負えないほど統制しにくい人びとであった。そのため彼らは絶えず隣人たちと揉めごとを起こし，激しく口論し戦って勝利した。そのころギリシア人の王たちが大軍勢を率いてアエネアスに立ち向かい，彼と戦って大量の殺戮を引き起こした。多くのトロイア人が戦いで倒れたために，アエネアスはイリウムの都市に引き籠った。ギリシア人たちはこの都市を10年間包囲した。この都市が落ちると，君主アエネアスは逃れ，戦いを続けるために部下たちをイタリアに移した。一方，トロイアの他の王侯であるプリアムスとアンテノルは残ったトロイア軍1万2000人の兵士を率いて船に乗り，出帆してタナイス川(3)の岸辺に到着した。それから彼らはマイオティス湖の湿地帯(4)を航行し，ここを通過してパンノニアの領域付近にまで達した。そしてそこに記念碑として都市を建設し始めた。この都市はシカンブリア(5)と名づけられ，そこに何年も過ごして偉大な民族に成長した(6)。

（1）　小アジアのヘレスポントス（現ダーダネルス）海峡に近い丘陵上にあった都市。イリウム Ilium はラテン名，ギリシア名はイリオン Ilion。別名トロイア（トロイ）Troia (Troy) として知られる。

（2）　ウェルギリウスの代表作『アエネイス』の主人公でありトロイア軍の指揮官。この作品のなかでは，アエネアスは，トロイア落城後，祖国を脱出して流浪し，多くの戦闘を繰り広げつつラティウムの地に入りローマ建国の礎を築いたとされる。

（3）　ドン川　vid. B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 23.

（4）　アゾフ海　vid. B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 23.

（5）「シカンブリ」*Sic(g)ambri* はカエサル時代にケルン北方のライン川右岸に住んでいたゲ

ルマニアの有力な1種族。彼らはフランク族に吸収されたためか，フランク族の別名となる。トゥールのグレゴリウスはクローヴィスの洗礼時の記述で，ランス司教レミギウスが彼を「シガンベル」と呼んだと伝えている。vid. Greg. Tur., *Hist. Franc.*, II, 31.

（6）　フレデガリウスもフランク族の起源をトロイア人に求めている。vid. Fredeg., *Chron.*, I, 5, II, 4–6, III, 2.

[…]

42　De morte Chlotharii et regnum Daygoberti.

Succedente vero tempore mortuus est Chlotharius rex senex regnavitque annis 44, regnumque eius Dagobertus rex, filius eius, in monarchiam in totis tribus regnis sagaciter accepit. Fuitque ipse Dagobertus rex fortissimus, enutritor Francorum, severissimus in iudiciis, ecclesiarum largitor. Ipse enim elimosinarum copia de fisco palacii per ecclesias sanctorum primus distribuere censum iussit. Pacem in cuncto regno suo statuit. In multis gentibus rumor eius personuit. Timorem et metum in universis regnis per circuitum incussit. Ipse pacificus, velut Salomon, quietus regnum obtenuit Francorum. Tunc et beatus Audoinus episcopus exortus enituit. Eo tempore, defuncto Gundolando maiorum domo inclito, Dagobertus rex Erchonoldo viro inlustre in maiorum domato statuit. Habebat igitur predictus rex ex regina sua Nanthilde de genere Saxonorum filios duos Sighiberto et Chlodovecho. Sighibertum vero, maiorem filium suum, in Auster una cum Pippino duce direxit in regno statuto, Chlodovecho quippe iuniore secum retenuit.

42　クロタールの死とダゴベルトの即位について。

時が経ち，クロタール王は44年間，王国を統治したのち，年老いて亡くなった(1)。そこで彼の息子ダゴベルトが3つの分王国すべての支配者となった(2)。ダゴベルト王はとても勇敢であり，フランク人の保護者であり，裁判ではきわめて厳正であり，教会への寄進者でもあった。実際，彼はまず王家の財庫から聖人たちを祀る教会中に沢山の施与をするように命じた。彼は王国すべてに平和をもたらした。彼の評判は多くの民族の間に知れ渡った。彼は周囲のすべての王国に恐怖や畏敬の念を抱かせた。彼はソロモンのように平和を好む人であり，フランク王国全体が平穏であるように努めた。このころ至福なる司教アウドインが世に知られ輝きはじめた(3)。当時，著名な宮宰であったグンドランドが亡くなったので，ダゴベルト王は高名なる人エルコノルドに宮宰職を委ねた(4)。先述の王はサクソン人出身の王妃ナンティルドとの間に2人の息子シギベルトとクローヴィスをもうけた(5)。王は長男のシギベルトをピピン公(6)とともにアウストラシアの分王国を統治するように送り込んだ(7)。弟のクローヴィスの方は自分のそばに置いた。

（1）　クロタール2世：ネウストリア王（位584–613年），全フランク王（位613–629年）。王の在位期間や系譜などについては，「訳者序文」で掲載した諸文献以外につぎの文献を参照。J. Morby, *Dynasties of the World, A Chronological Handbook*, Oxford, NY, 1989. J. A. Martindale, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, vol. 3, A.B, Cambridge, 1992. R. Kaiser, *Das Röminische Erbe und Merowinger Reich*, München, 1993, pp. 138–139. P. Riché, *Dictionnaire des Francs, les temps mérovingiens*, Paris, 1996.（以下も同じ）。

（2）　ダゴベルト1世：アウストラシア王（位623–629年），全フランク王（位629–638年）。

（3）　アウドインはダゴベルト王の王宮の尚書局高官レフェレンダリウスを勤めた，同王の最も重要な助言者のひとりであった。641年にルーアン司教に叙任されている。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 137–152.

（4）　フレデガリウスの『年代記』によれば，エルコノルドは，グンドランドではなく，アエガの後を継いだ。vid. Fredeg., *Chron.*, IV, 83–84. ここで用いられている principatus は明らかに「宮宰職」を指している。この点については第48章訳註(4)を参照のこと。

（5）　ナンティルドはダゴベルト王の3番目の夫人。フレデガリウスによれば，シギベルトはナンティルドではなく2番目の夫人ラグネトルドとの間に生まれた息子である。vid. Fredeg., *Chron.*, IV, 59.

（6）　クロタール2世治世下のアウストラシア宮宰ピピン1世（639/40年没）。

（7）　シギベルト3世：アウストラシア王（位633/4–656年）。クロタール2世没後，ダゴベルト1世がピピン1世とともにパリへ移ったために，アウストラシア貴族層がピピンに反発し，それに伴って周辺異民族も不穏な動きを見せるようになった。当時まだ3歳であったシギベルトがアウストラシアに送られたのは，こうした政治的情勢下の措置であったと考えられる。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 13–17. H. Haupter, *op. cit.*, p. 365, n. 90.

43　De morte Daygoberti et Sighyberti, et regnum Chlodovechi.

Post haec igitur rex Daygobertus a febre valida correptus, egrotans mortuus est Spinoglio villa in paygo Parisiacense urbis, in basilica beati Dionisii martyris sepultus. Plancxeruntque eum Franci diebus multis, regnavitque annis 44. Chlodovechum, filium eius, Franci super se regem statuunt; accepitque uxorem de genere Saxonorum nomine Balthilde, pulchra omnique ingenio strenua. Post haec autem Sighibertus rex Auster, Pippino defuncto, Grimoaldo, filio eius, in maiorum domato instituit. Decedente vero tempore, defuncto Sighiberto rege, Grimoaldus filium eius parvolum nomine Daygobertum totundit Didonemque Pectavensem urbis episcopum in Scocia peregrinandum eum direxit, filium suum in regno constituens. Franci itaque hoc valde indignantes, Grimoaldo insidias preparant, eumque exementes, ad condempnandum rege Francorum Chlodoveo deferunt. In Parisius civitate in carcere mancipatus, vinculorum cruciatu constrictus, ut erat morte dignus, quod in domino suo exercuit, ipsius mors valido cruciatu finivit.

43　ダゴベルトとシギベルトの死およびクローヴィスの即位について。

こののちダゴベルト王は高い熱に襲われて衰弱し，パリ市の1地区にあったエピネイ・スュル・セーヌのヴィラで亡くなり，殉教者サン・ドニの教会に埋葬された[1]。フ

ランクの人びと[2]は長い間，王の死を嘆き悲しんだ。彼は44年もの間統治した。フランク人たちは彼の息子クローヴィスを王に頂いた[3]。彼はバルティルドという名のサクソン族出身の娘を王妃に迎えた。彼女は美しく，すべてに才気溢れる女性であった[4]。他方，アウストラシアのシギベルトは，ピピンが亡くなったので[5]，その息子グリモアルドを宮宰に任命した。暫くしてシギベルト王が亡くなると[6]，グリモアルドはこの王の幼い息子ダゴベルトを剃髪させ，アイルランドへ巡礼の旅に行かせるようにポワティエ司教ディオのもとに送った[7]。それからグリモアルドは自分自身の息子を王座に据えた[8]。これに対してフランク人たちはたいへんに怒り，グリモアルドを待ち伏せして捕え，彼に有罪判決を下すようにフランク王クローヴィスのところに連れて行った。パリの町で彼は牢獄に入れられ，頑丈な鎖に繋がれ，ついには彼の主人になした当然の報いとして激しい苦痛のうちに死亡した。

（1）　638年。

（2）　著者の用いる‘Franci’は，訳者序文でもふれたが，ネウストリア人を意味する。そのため，フォーラカーとゲルベルディングは*LHF*に記載されている‘Franci’をすべて「ネウストリア人」Neustoriansと訳している。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 88, n. 29.

（3）　クローヴィス2世：ネウストリア王，ブルグンディア王（位638/9–657年）。

（4）　この女性は宮宰エルコノルド（第42章参照）に買われたアングロ・サクソン系奴隷であった。vid. P. Riché, *op. cit.*, p. 66. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 97–132.

（5）　639/40年。フレデガリウスによれば，ピピンの死はダゴベルト王の死のおよそ1年後のことである。リシェやドゥヴィエール（他）は640年とする。vid. Fredeg., *Chron.*, IV, 85. P. Riché, *op. cit.*, p. 263. O. Devillers et al., *op. cit.*, pp. 189–190, n. 696.

（6）　656年。

（7）　のちのダゴベルト2世：アウストラシア王（位676–679年）。彼はアイルランドの修道院におよそ15年または20年とどまった。vid. P. Riché, *op. cit.*, p. 122. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 18.

（8）「養子のキルデベルト」：アウストラシア王（位656–662年）。グリモアルドはシギベルト3世の養子としてこの息子にメロヴィング家系の名前「キルデベルト」を与えた。これはグリモアルドのクーデタとみなされる。ただし，近年の研究によれば，この「王」はシギベルト3世の実子の可能性もある。vid. H. Haupter., *op. cit.*, p. 365, n. 97. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 48–49. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 18. P. Riché, *op. cit.*, pp. 88–89, 308.

44　Quo tempore regnum Francorum concidit, et de morte Chlodovechi, et regnum Chlotharii.

Eo tempore Chlodoveus brachium beati Dionisii martyris abscidit, instigante diabulo. Per id tempus concidit regnum Francorum casibus pestiferis. Fuit autem ipse Chlodoveus omne spurcicia deditus, fornicarius et inlusor feminarum, gulae et ebrietate contentus. Huius mortem et finem nihil dignum historia recolit. Multa enim scriptores eius finem condempnant; nescientes

finem nequitiae eius, in incertum de eo alia pro aliis referunt. Nam ex Balthilde, regina eius, adserunt ei tres filios habuisse Chlotharium, Childericum atque Theudericum. Decedente itaque in extremis prefatum regem Chlodoveum, regnavitque annis 16. Franci vero Chlotharium, seniorem puerum ex tribus, regem sibi statuunt, cum ipsa regina matre regnaturum.

44　フランク族の王国を誰が破壊したか。またクローヴィスの死とクロタールの即位について。

このころクローヴィスは悪魔にそそのかされて殉教者サン・ドニの腕を切り取った。同じころフランク人の王国は悲惨な大災難に襲われた。しかも，このクローヴィスはあらゆる類の欲望に溺れていた。彼は女たちをもてあそび，饗宴に明け暮れた放蕩者であった。彼の最期や死については歴史にとどめる価値は何もないと思われる。実際，歴史家たちは彼の最期を厳しく非難しているが，彼の悪業がどれほどのものであったかわからなくて，彼についてあれこれと漠然と伝えている。しかし，歴史家たちは彼が王妃バティルドとの間に3人の息子，つまりクロタール，キルデリックそれにテウデリックをもうけたと記述している(1)。こうして上記のクローヴィス王はやがて亡くなった(2)。彼は16年間統治した。そこでフランク人たちは3人の息子のうちでも長兄であるクロタールを，王后を摂政として王位に即けた(3)。

（1）　この3人の王子たちはいずれも王位に即いている（第45章参照）。
（2）　657年。
（3）　クロタール3世（第45章訳註(2)参照）。

45　Ubi Ebroinus maiorum domus elegitur, Chlothariusque rex moritur, regnumque Theudericus et Childericus adsumitur.

Eo tempore, defuncto Erchonoldo maiorum domo, Franci in incertum vacellantes, prefinito consilio, Ebroino huius honoris altitudine maiorum domo in aula regis statuunt. In his diebus Chlotharius rex puer obiit regnavitque annis 4. Theudericus, frater eius, elevatus est rex Francorum. Childericum itaque, alium fratrem eius, in Auster una cum Vulfoaldo duce regnum suscipere dirigunt. Eo tempore Franci adversus Ebroinum insidias preparant, super Theudericum consurgunt eumque de regno deiciunt, crinesque capitis amborum vi abstrahentes, incidunt. Ebroinum totundunt eumque Luxovio monasterio in Burgundia dirigunt. In Auster propter Childericum mittentes, accomodant. Et una cum Vulfoaldo duce veniens, in regno Francorum elevatus est. Erat enim ipse Childericus levis nimis, omnia nimis incaute peragebat, donec inter eos odium maximum et scandalum crevit, Francos valde oppremens. Ex quibus uno Franco nomine Bodilone ad stipitem tensum cedere valde sine lege precepit. Haec videntes Franci, in ira

magna commoti, Ingobertus videlicet et Amalbertus et reliqui maiores natu Francorum, sedicionem contra ipsum Childericum concitantes. Bodilo super eum cum reliquis surrexit, insidiaturus in regem; interficit una cum regina eius pregnante, quod dici dolor est. Vulfoaldus quoque per fugam vix evasit, in Auster reversus. Franci autem Leudesio, filio Erchonoldo, in maiorum domato palacii elegunt. Eratque ex Burgundia in hoc consilio beatus Leudegarius Augustudunensis episcopus et Gaerinus, frater eius, consentientes. Ebroinus capillis crescere sinens, congregatis in auxilium sociis, hostiliter a Luxovio caenubio egressus, in Francia revertitur cum armorum apparatu. Ad beatum vero Audoinum direxit, quid ei consilio daret. At ille per internuntios hoc solum, scripta dirigens, ait: 'De Fredegunde tibi subveniat in memoriam'. At ille, ingeniosus ut erat, intellexit. De nocte consurgens, commoto exercitu, usque Isra fluvium veniens, interfectis custodibus, ad Sanctam Maxenciam Isra transiit; ibi quos repperit de insidiatoribus suis occidit. Leudesius una cum Theuderico rege et sociis quam plurimis per fugam evasit; Ebroinus eos persequutus est. Bacivo villa veniens, thesauros regales adprehendit. Deinde post haec Crisciaeco veniens, regem recepit. Leudesium, data fide, sub dolo ad se venire mandavit. Quo facto, Leudesium interficit; ipse principatum sagaciter recepit. Sanctum Leudegarium episcopum diversis poenis caesum gladio ferire iussit; Gaerinum, fratrem eius, dira poena damnavit. Reliqui vero Franci eorum socii per fugam vix evaserunt; nonnulli vero in exilio pervagati, a propriis facultatibus privati sunt.

45　エブロインが宮宰に選ばれ，クロタールが死に，テウデリックとキルデリックが王位に即いた。

こののち宮宰エルコノルドが亡くなったが，フランク人たちは後任をなかなか決められず，やっと協議の場をもって，宮宰職という高い地位にエブロインを就けることにした[(1)]。このころクロタール王はまだ少年であったが，4年間王座にいたのち亡くなった[(2)]。そこでフランク人たちは彼の弟テウデリックをフランク人の王に即け[(3)]，もうひとりの弟キルデリック[(4)]を，アウストラシアの統治を引き継ぐよう，ウルフォアルド公と一緒に送り込んだ。そののち暫くして，フランク人たちはエブロインに敵意を抱き，待ち伏せして捕え，テウデリックに対して謀反を起こして王座から追放した。彼らは無理やり引っ張り出して2人の髪を刈り取り，エブロインを剃髪させてブルグンディアのリュクスィユ修道院に送り込んだ[(5)]。そして彼らはキルデリックを呼びにアウストラシアに使者を派遣し，彼を連れ戻した。彼がウルフォアルド公と一緒に戻ってくると，彼らは彼をフランク人の王位[(6)]に即けた。しかし，このキルデリックはたいへん軽薄で，すべてのことで思慮に欠けた振舞いをした。そしてフランク人をひどく抑圧したので，ついに彼らの憎しみと怒りは頂点に達した。王は彼らのなかのボディロという名のフランク人を法に反して杭に縛りつけ厳しく鞭打つように命じた。フランク人たちはこれを

見てたいへん立腹し，インゴベルトやアマルベルトは他のフランク人の有力者たちと協力してキルデリックに対して反乱を起こした。ボディロも他のフランク人と一緒に謀反を起こし，王に立ち向かい，語るのもはばかられるが，この王を身ごもっている王妃(7)ともども殺害した。ウルフォアルドはやっとのことで逃れて助かりアウストラシアに戻った。そこでフランク人たちはエルコノルドの息子であるレウデシウスを宮宰の職に選んだ。ブルグンディアからは至福なるオータンの司教レウデガルと彼の兄弟であるガエリヌスがこの協議に参加して同意した。その間にエブロインは髪を伸ばし，彼を支援する仲間の一団を集めて，力づくでリュクスィユ修道院を脱出し，軍団を率いてフランキアに戻った。それから彼は聖アウドインの下に助言を求めて使者を派遣した。しかしアウドインは使者を介して，つぎのような一言，つまり「フレデグンドのことを思い浮かべなさい」と書いて送っただけであった(8)。エブロインは彼と同じく明晰な人物であったのでそれを理解できた。そこで夜中に出発して，軍隊を集結させ，オワーズ川までやって来て歩哨たちを殺害し，ポン・サント・マクセンス(9)の近くでオワーズ川を渡った。そこでは彼は自分に敵対する者はすべて殺害した。レウデシウスはテウデリック王を連れて彼らの多くの従者とともに逃れたが(10)，エブロインは彼らを追跡し，ベジウー(11)に到着すると王家の財宝を手に入れた。そののち彼はクレシ・アン・ポンティュ(12)に到着して王を取り戻した(13)。彼はレウデシウスを卑劣にもあらかじめ身の安全を保障するといって騙し，彼のもとに出頭させた。そしてレウデシウスがやって来ると，彼はこの男を殺害し，ただちに再び宮宰職を手に入れた。さらに彼は聖なる司教レウデガルをさまざまな拷問にかけ，ついにはこの司教を剣でもって殺害するように命じ，弟のガエリヌスには残酷な処罰を科した。彼らの仲間であった残りのフランク人たちは辛うじて逃走したが，そのうちの幾人かは財産を没収され異郷をさまよった。

（1）　657年。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 19–20. cf. H. Haupter, *op. cit.*, p. 367, n. 7（658年）。

（2）　クロタール3世：ネウストリア王，ブルグンディア王（位657–673年）。この王は657年の父王クローヴィス3世没後，母バティルドを摂政として即位し，19歳のころまで統治し亡くなっている。したがって，彼はこの時点では「まだ少年」ではなかった。vid. H. Haupter, *op. cit.*, p. 367, n. 8. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 18–19, 88, n. 29.

（3）　テウデリック3世：ネウストリア王（位673年），ネウストリア王，ブルグンディア王（676–679年），全フランク王（679–690/1年）。テウデリックは673年に反エブロイン派の反乱により追放され，一時サン・ドニ修道院に送り込まれている。（本章訳註(5)参照）。なお，676–679年におけるアウストラシア王はシギベルト3世の息子ダゴベルト2世であった。

（4）　キルデリック2世：アウストラシア王（位662–673年），全フランク王（位673–675年）。キルデリックは「養子のキルデベルト」の没後，アウストラシア王となっている（第43章註(7)参照）。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 21–22, 122. P. Riché, *op. cit.*, p. 95.

（5）　テウデリック王はサン・ドニ修道院に送られ，エブロインはリュクスィユ修道院に送り込まれた。vid. *Passio Leudegarii Episcopi et Martyris Augustodunensis*, 6, in *MGH*, *SRM*, t. V,

Hannover, 1910, P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 222–223. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 69–70. リュクスィユ修道院はアイルランドの修道士コルンバヌスが6世紀末ごろにアングレイ修道院やフォンテーヌ修道院とともブルゴーニュ地方に建てた「フランスのモンテ・カッシノ」と呼ばれる重要な修道院である。

(6)　ネウストリア人の王を意味する。(上記註(3)および第43章訳註(2)参照)。

(7)　ビルキルド（シギベルト3世の娘），675年秋。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 19–22. H. Haupter., *op. cit.*, p. 368.

(8)　計画は夜に実行されるべきことを示唆している。著者は第36章でアウストラシア軍に対するフレデグンドの「賢明なる夜の進軍」について言及している。vid. *LHF*, cap. 36.

(9)　Dép. Oise, Ar. Senlis. (Dép.=Département 県, Ar.=Arondissement 郡).

(10)　この記述は，キルデリック王殺害後，レウデシウスがサン・ドニ修道院にいたテウデリック3世を擁立していたことを物語っている。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 83.

(11)　Dép. Somme, Ar. Amiens, Ct. Corbie. (Ct.=Canton 小郡).

(12)　Dép. Somme, Ar. Abbéville.

(13)　テウデリック3世を指す。エブロインはこの蜂起に際して，人びとに「テウデリック3世はすでに死んだ」と信じさせ，*LHF* の著者がまったくふれていない「クローヴィス」と名乗る「簒奪者」をクロタール3世の息子と称して王に擁立（675–676年）している。なお，この蜂起は，*LHF* 第53章のカール・マルテルの事例でも認識できるが，メロヴィング時代には，軍隊を召集する場合，「王」の存在が王家の「財宝」とともに必要であったことを示している。vid. *Passio Leudegari*, 19. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 82–83, 212, 235–236.

46　Quod Martinus et Pippinus duces Austrasiorum bellum agunt contra Ebroinum et Theudericum.

Eo quoque tempore, decedente Vulfoaldo de Auster, Martinus et Pippinus iunior, filius Anseghiselo quondam, decedentibus regibus, dominabantur in Austria, donec tandem aliquando hii duces in odium versi contra Ebroinum, exercitum plurimum Austrasiorum commotum, contra Theudericum regem et Ebroinum aciem dirigunt. Contra quos Theudericus et Ebroinus cum hoste occurrunt, loco nuncupante Lucofao simul coniuncti, sese invicem cede magna prosternunt. Corrueruntque ibi infinita turba populi. Austrasii devicti, in fugam lapsi, terga verterunt. Ebroinus eos cede crudelissima insequutus, maxima parte ex illa regione vastata. Martinus per fugam elapsus, Lauduno Clavato ingressus, illuc se rechusit; Pippinus autem　altrinsecus evasit. Ebroinus itaque, patrata victoria, reversus est. Veniens cum exercitu Erchreco villa, ad Martinum dirigit nuncios, ut, data sacramenta, cum fiducia ad regem Theudericum veniret. Hoc dolose ac fallaciter super vacuas capsas ei iurantes, ille vero credens eos, Erchreco veniens, ibi cum sociis suis interfectus est.

46　アウストラシアのマルティヌス公とピピン公がエブロインおよびテウデリックに対して戦いを行う。

このころアウストラシアのウルフォアルドが死に，王たちも亡くなったので，マルティヌスと故アンセギセルの息子ピピン２世[1]がアウストラシアを統治した。こののち，これらの諸公はエブロインに憎しみを抱き，アウストラシア人たちからなる大軍を編成して，テウデリック王とエブロインに対して軍隊を送り込んだ。テウデリックとエブロインも軍隊を率いてこれらの諸公に立ち向かった。ボワ・デュ・ファイと呼ばれる地[2]で彼らは会戦し，互いに激しく戦って大殺戮を行なった。無数の人びとがそこで戦死した。結局，アウストラシア軍は敗れて背走した[3]。エブロインは彼らを追跡し残酷な殺戮を行ない，その地域一体を荒らしまわった。マルティヌスは逃走してランに入り，そこに籠城した。しかし，ピピンは別の方向に逃走した。そこでエブロインは勝利を得て戻った。彼は軍隊を率いてエクリのヴィラ[4]にやって来ると，マルティヌスに使者を送り，誓約がなされ，信頼してテウデリック王のところに来るようにと伝えた。使者たちは偽って巧妙に空の聖遺物箱に手をおいて彼のために宣誓した。しかし，マルティヌスはこれを信じてエクリにやって来たので，そこで彼は従者と一緒に殺害された。

（１）　*Pippinus iunior* はピピン１世（大）の孫，ピピン２世（中）を指す（714年没）。

（２）　Bois-du-Fays (Lucofao): vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 91. Dép. Aisne, Ar. Soissons, Ct. Valley-sur-Aisne. cf. Bois-Royal-Fays: B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 105. H. Haupter., *op. cit.*, p. 370, n. 29.

（３）　680年頃。この戦いは通常，ダゴベルト２世の死（679年12月23日）後，エブロインの死（680年５月15日）の前に位置づけられるが，ゲルベルディングによればダゴベルト王の死より前のことである。vid. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 72–84. なお，カロリング家が権力を掌握した９世紀初頭に書かれた『初期メッス年代記』の著者は，ピピン側のこの軍事的失敗を無視している。vid. *Annales Mettenses Priores*, ed., B. de Simson, in *MGH*, *SRG*, Hannover, Leiptig, 1905, pp. 7–12. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 83, 350–370.

（４）　Ecry: Dép. Aisne (Il-de-France), Ar. Laon, Ct. La Faèe. vid. B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 105. H. Haupter, *op. cit.*, p. 371, n. 30. cf. Asfeid: P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 91.

47　Ubi Ebroinus occiditur, Waratto maiorum domato adsumitur, et sanctus Audoinus ad Dominum migratur.

Ebroinus itaque magis ac magis Francos crudeliter oppremebat, donec tandem aliquando Ermenfredo Franco insidias parare dissimulat. Ille quoque per noctem clam super eum consurgens, atrociter prefatum Ebroinum interficit, atque ad Pippinum in Auster fugiens, evasit. Franci vero consilio pertractantes, Warattonem virum inlustrem in loco eius cum iussione regis maiorum domo palacii constituunt. Accepit ipse Waratto inter haec obsides a predicto Pippino et

pacem cum eo iniit. Erat id temporis memorato Warattone filius efficax industriusque, fero animo et acervis moribus, insidiator patris sui, eumque ab honore generositatis subplantans, eratque nomen eius Ghislemarus. Cui beatus Audoinus episcopus prohibuit, ne hac nequicia contra patrem inferret; quod ille audire contempsit. Fueruntque inter ipso Ghislemaro et Pippino bella civilia et multae discordiae. Qui ob iniurias patris vel alia peccata crudelia a Deo percussus, iniquissimum spiritum exalavit, iuxta quod sanctus Audoinus ei predixerat, Illoque defuncto, Waratto iterum honore pristino nanctus est. Sub his diebus beatus Audoinus Rotimagensis episcopus plenus dierum ac virtutibus preclarus Clepiaco villa regale in suburbana Parisiorum civitate migravit ad Dominum; cum gloria basilica sancti Petri apostoli Rothomacum civitate sepultus est.

47　エブロインが殺害され，ワラットーが宮宰になり，聖なるアウドインが主の下に行った。

こうしてエブロインはフランク人たちをますます抑圧するようになり，エルメンフレドというひとりのフランク人に謀略を企てるまでになった。そこでエルメンフレドは夜中に前記のエブロインに対して秘かに立ち上がり，彼を残酷なやり方で殺害し(1)，アウストラシアのピピンのところに逃亡した。そののちフランク人たちは熟考し，王(2)の命令により，著名なる人ワラットーをエブロインのかわりに宮宰に選んだ。ワラットーはこのとき先述のピピンから人質を受け入れ，彼と和平を結んだ。このワラットーには当時ひとりの息子がいた。彼は力強くて活発な人物であったが，荒あらしく残酷な性格の持ち主であり，自分の父親に対して謀反を企て，父親を力づくでその高い地位から引きずり下ろし，自らその地位に就いた(3)。彼の名前はギスレマルであった。至福なる司教アウドインは自分の父親にそのような悪事をやってはならないと戒めたが，彼は聴く耳をもたなかった。このギスレマルとピピンとの間にも多くの揉めごとや争いが起こった。結局，彼は自分の父親に対して行なった不正や他の残忍な罪のために神により罰せられ，聖なるアウドインが予言したように自分の最も悪しき魂を失った。彼が亡くなったので，ワラットーが再びもとの宮宰の地位に就いた。このころ至福なるルーアンの司教アウドインが天寿を全うし，奇跡で名声を博して，パリ郊外のクリシにある王のヴィラ(4)で主の下に行った。彼はルーアンの聖使徒ペテロ教会に盛大な葬儀のうちに埋葬された。

（1）　680年。
（2）　テウデリック3世。
（3）　683年。
（4）　Dép. Seine, Ar. St. Denis. vid. H. Haupter, *op. cit.*, p. 372, n. 38, P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 92.

cf. Saint-Ouen-sur-Seine: B. S. Bachrach, *op. cit.*, p. 105.

48　Quod Waratto moritur, et Bercharius in loco eius constituitur, Pippinusque, eos devictos, maiorum domato in sua redigit potestate.

Succedente quippe temporum curricola predictus Waratto defunctus est; fuitque ei matrona nobilis ac ingeniosa nomine Anseflidis. Franci nempe in diversa tendentes, vacellabant. Interdum Bercharium quondam statura pusillum, sapientia ignobilem, consilio inutile, in maiorum domato oberrantes statuunt Franci in invicem divisi. Pippinus ab Austrasiis consurgens, commoto hoste quam plurimo, contra Theudericum regem et Bercharium aciem dirigit. Convenientesque ad proelium in loco nuncupante Textricio, illisque inter se belligerantibus, Theudericus rex una cum Berchario maiorum domo terga verterunt. Pippinus quoque victor extitit. Cedendum itaque tempore ipse Bercharius ab adulatoribus occisus est, et, instigante Anseflide, post haec Pippinus Theuderico rege coepit esse principale regimine maiorum domus. Thesauris acceptis, Nordebertum quondam de suis cum rege relictum, ipse in Austria remeavit. Eratque Pippino Principe uxor nobilissima et sapientissima nomine Plectrudis. Ex ipsa genuit filios duos: nomen maioris Drocus, nomen vero minoris Grimoaldus. Drocus ducatum Campaniae accepit.

48　ワラットーが死にベルカルがその地位に就いた。ついでピピンが彼を破り宮宰職を掌握した。

それから時が経つうちに上記のワラットーが亡くなった(1)。彼にはアンセフレドという高貴で賢い妻がいた。フランク人たちは意見がさまざまに分かれ，何も解決することができずにいた。結局，フランク人たちは誤って背が低く，知性もなく，良き助言もできないベルカルという人物を宮宰に選んだ。そこでピピンはアウストラシアで蜂起して大軍を召集し，テウデリック王とベルカルに向かって進軍した。双方はテルトリーと呼ばれる地で遭遇して交戦した(2)。そしてテウデリック王は宮宰ベルカルと一緒に逃走し，ピピンが勝利を収めた。こののちすぐに，ベルカル自身は腹黒い取り巻きたちにより殺害された。その後，ピピンはアンセフレドの勧めに従ってテウデリック王の宮廷の宮宰として実質的な統治を行うようになった(3)。そして財宝を手に入れ，ノルデベルトという臣下のひとりを王のもとに残して自分はアウストラシアに戻った。このプリンケプス・ピピン(4)にはプレクトルドというとても高貴で賢い妻がいた。ピピンは彼女との間にふたりの息子をもうけた。兄の名はドロゴ，弟の名はグリモアルドであり，ドロゴはシャンパーニュの公領を受領した。

（1）　686年。
（2）　687年。Dép. Somme, Ar. Peronne, Ct. Ham.

（3）　688年。なお，テキストのA版とB版ではこの部分が異なり，クルシュが編纂したA版には instigante Anseflede の前に et があり，B版には et がない。B版を用いた場合，「アンセフレドの勧め」をベルカルの殺害にかけて読むことがでる。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 92, R. A. Gerberding, *op. cit.*, p. 178.

ゲルベルディングは，この章の内容，つまりピピンのネウストリア登場が *LHF* の著者にとっても重大事であったことを示してはいるが，『初期メッス年代記』やエルカンベルトの『フランク王国抄典』，さらにはフレデガリウス『年代記』に比べると，まだネウストリア内部の政治的問題に強い関心を抱き，東の新勢力に対する注目度が低いと指摘している。vid. R. A. Gerberding, *op. cit.*, p. 94. *Annales Met*, *Prio.*, *op. cit.*, pp. 7–12. Erchanbert, *Brebiarium Regum Francorum*, in, *MGH*, *SS.* t. II, Hannover, 1829, pp. 327–329. Fredeg., *Cont.*, 5.

（4）　*LHF* の著者はピピン1世に対しては第42章で dux を用い，ピピン2世に対しても第46章の章題で dux を用いているが，テルトリー戦後のこの章および49，50章の記述ではピピン2世に対して princeps を用いている。ローマ帝政時代の政治的権威の響きをもつこの称号はメロヴィング関係の諸史料にしばしば登場するが，その意味は史料により dux, maior domus, あるいは rex などと同義のように用いられており，正確な概念をもって扱われているとは思われない。*LHF* の著者は，第51章で princeps を rex の下位に位置づけ，第49章と第50章では princeps と maior domus を明確に区別して用いている。ただし，第42章，および51章の章題では宮宰職に principatus をあてている。それゆえ，彼が princeps を dux よりも上位，rex よりも下位，maior domus よりも上位（少なくとも同格）の指導者ないしは権力者と見なしていることは疑いなかろう。これらの点から判断すると，*LHF* の著者はテルトリー戦後のピピン2世に princeps の称号を用いることによって，彼の立場を一段と高く評価しようとしたと考えられる。vid. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 111–112. P. Fouracre et al., *op. cit.*, pp. 68–69. S. Lebecq, *Les origines franques*, *Ve–IXe sècle*, Paris, 1990, pp. 180–184. なお，フレデガリウスの『年代記』の補充版を訳したドゥビエール（他）は，カール・マルテルにあてられた princeps を注釈して maior domus と同義と解釈しているが，補充版の第3章ではエブロインのみならず，マルティヌスとピピンにもこの称号が用いられており，同義とは断定しがたいように思われる。vid. O. Devillers et al., *op. cit.*, *Cont.* 3–11, n. 844, pp. 206, 216–217.

49　De obitu Theuderici et regnum Chlodovechi et Childeberti et Grimoaldo maiorum domo.

Obiit autem Theudericus rex; regnavit annis 19. Chlodoveus, filius eius, puer regalem sedem suscepit, ex regina nomine Chrodchilde progenitus. Nec multo post ipse Chlodoveus rex puer mortuus est regnavitque annis 2. Childebertus, frater eius, vir inclytus in regno statutus est. Attamen et Nordebertus mortuus est. Grimoaldus, Pippini principis filius iunior, in aula regis Chideberti maiorum domus effectus est. Pippinus quoque multa bella gessit contra Radbodem gentilem vel alios principes, contra Suevos vel quam plurimas gentes. Grimoaldus quippe genuit filium ex concubina Theudoaldo nomine. Sub idem fere tempus Drocus, filius Pippini, defunctus est, habensque Pippinus prefatus princeps filium ex alia uxore nomine Carlo, virum elegantem, egregium atque utilem.

49　テウデリックの死，クローヴィスとキルデベルトの即位，およびグリモアルドの宮宰について。

テウデリック王が亡くなった[1]。彼は19年間統治した。彼の息子であり，クロドキルドという名の王妃との間に生まれた少年クローヴィスが王座についた[2]。ほどなくして，この少年も亡くなった。彼は2年間統治した[3]。彼の兄弟であり名高きキルデベルトが王位についた[4]。それからノルデベルトが死んだ。プリンケプス・ピピンの2番目の息子グリモアルドがキルデベルト王の宮廷で宮宰となった[5]。ピピンもまた異教徒のラドボド[6]や他の諸公[7]に対して，またスエヴィ族に対して，同じく他の諸民族に対して多くの戦いを行った。ところで，グリモアルドは側室との間にテウドアルドという名の息子をもうけた。この時期にピピンの息子ドロゴが亡くなった。上記のプリンケプス・ピピンには他の妻との間にカールという名の息子がいた[8]。彼は堂どうとしていて卓越した有能な人物であった。

（1）　テウデリック3世690/1年没。（第45章訳註(3)参照）。
（2）　クローヴィス3世（位690/1–694/5年）。
（3）　正しくは，2年でなく，4年の統治。vid. Fredeg., *Cont.*, 6.
（4）　キルデベルト3世（位694/5–711年）。
（5）　697年。ここで用いられる principes と maior domus は明らかに区別して用いられている。第48章訳註(4)参照。
（6）　フリジア人の指導者。689年のピピンとの戦いで西フリースランドを失っている。
（7）　ここで用いられる dux も principes との対比の上で注目される。第48章訳註(4)参照。
（8）　カール・マルテル（684–741年）宮宰（位アウストラシア：714–741年，ネウストリア：717–741年）。彼はピピン2世とアルパイダ（カルパイダ）との間に生まれた庶子である。vid. P. Riché, *op. cit.*, pp. 81–82. H. Haupter, *op. cit.*, p. 375, n. 59.

50　De transitu Childeberti et regnum Daygoberti, et quia Grimoaldus interficitur, et honorem patris sui Theudoaldus ambitur.

Tunc enim bonae memoriae gloriosus domnus Childebertus rex iustus migravit ad Dominum; regnavit autem annis 17, sepultusque est Cauciaeco monasterio in basilica sancti Stephani protomartyris. Regnavitque Daygobertus puer, filius eius, pro eo. Habebat igitur Grimoaldus uxorem in matrimonium nomine Theudesindam, filiam Radbodis ducis gentilis. Eratque ipse Grimoaldus maiorum domus pius, modestus, mansuetus et instus. Cedendum enim tempore, egrotante Pippino principe, genitorem eius, dum ad eum visitandum accessisset, nec mora in basilica sancti Landeberti martyris Leudico peremptus est a Rantgario gentile, filio Belial. Theudoaldum vero, iubente avo, in aula regis honorem patris sedem sublimem instituunt.

50　キルデベルトの死とダゴベルトの即位について。グリモアルドが殺害されたために，父を称えて息子のテウドアルドが宮宰に就けられた。

そのころ，著名で誉れ高く，公正な王キルデベルトが神に召されてこの世を去った[1]。彼は17年間統治した。彼の遺骸は最初の殉教者である聖ステファヌス教会のショワジ・オゥ・バク修道院に埋葬された[2]。この王にかわって，彼の息子であり，まだ少年であったダゴベルトが即位した[3]。グリモアルドは，そのころ異教徒であったラドボド公の娘テウデシンダという名の妻を娶っていた。この宮宰グリモアルドは敬虔で穏健であり，平和を愛する公正な人であった。しかし，しばらくしてプリンケプス・ピピンが病気になり，彼が自分の父親を訪ねる旅に出かけたとき，リエージュの聖殉教者ランベルト教会において，突然ベリアルの息子であったラントガルという名の異教徒に殺害された[4]。そこで祖父の指示により，人びとはテウドアルドを王の宮廷で彼の父親の役職と高い位階に就任させた。

（1）　キルデベルト3世（711年没）。
（2）　Dép. Oise, Ar. Compiègne.
（3）　ダゴベルト3世（位711–715年）。
（4）　714年。

51　De morte Pippini et bella Francorum inter se, et, Theudoaldo fugato, Ragamfredus in principatum est elevatus.

Eo tempore Pippinus febre valida correptus, mortuus est obtenuitque principatum sub suprascriptos reges annis 27 et dimidio. Plectrudis quoque cum nepotibus suis vel rege cuncta gubernabat sub discreto regimine. In illis diebus instigante diabulo, Franci denuo Cocia silva in Francos invicem inruunt ac sese mutuo dirissima cede prosternunt. Theudoaldus autem per fugam lapsus, ereptus est; fuitque illo tempore valida persequutio. Theudoaldo enim fugato, Ragamfredo in principatum maiorum palacii elegerunt. Qui, commoto cum rege exercitu, Carbonaria silva transeuntes, usque Mosam fluvium terras illas vastantes succenderunt; cum Radbode duce gentile amicicias feriunt. Carlus his diebus cum captus a Plectrude femina sub custodia teneretur, auxiliante Domino, vix evasit.

51　ピピンの死，フランク人たちの内乱，テウドアルドの逃走，王国の要職へのラガンフレドの選出について。

このころ，ピピンが激しい熱におかされて亡くなった[1]。彼は27年と半年の間，上記の王たちの下でプリンケプスの立場にあった。そののち，プレクトルドが自分の孫たちや王とともに宮廷とは離れてすべての国政を指導した[2]。この当時，悪魔にそそのかさ

れて，フランク人たちが再びフランク人たちを襲い，彼らはコンピエーニュの森で最も恐ろしい殺戮を行ない互いに殺し合った(3)。しかしながら，テウドアルドは辛うじて救い出され逃げのびた。このころ激しい追跡がなされた。テウドアルドが逃走したのち，彼らはラガンフレドを宮宰という最高の地位に選んだ(4)。そして彼らは軍隊を集め，王とともにシャルボニエールの森を通り抜け，マース川に至るまでの地域を荒しまわり，火を放った。それから彼らは異教徒のラドボド公と友好同盟を結んだ(5)。この当時，カールはプレクトルド夫人に拘束されていたが，神の加護により苦労して脱走した(6)。

（1） 714年。
（2） *sub discreto regimine* はダゴベルト3世と未成年の宮宰テウドアルドの後見政権を意味すると考えられる。
（3） この「フランク人たち」は双方ともネウストリア人を指す。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 94.
（4） この「彼ら」とはネウストリア人を指す。ラガンフレドはそのうちの反ピピン派のひとりと考えられる。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 26.
（5） これはピピン2世没後のアウストラシア混乱期に乗じたネウストリアとフリジア族との対アウストラシア同盟と考えられる。第49章訳註(6)，第52章参照。
（6） 715年夏。プレクトルドはカール・マルテルの義母にあたる。第48章，および第49章訳註(8)参照。

52 De morte Daygoberti et regnum Chilperici, et quod bellum gessit Carlus contra Radbode.

Sequenti tempore Dagobertus rex egrotans mortuus est regnavitque annis 5. Franci nimirum Danielem quondam clericum, cesarie capitis crescente, eum in regnum stabiliunt atque Chilpericum nuncupant. Eo nempe tempore denuo exercitum movent, usque ipsum fluvium Mosam contra Carlum dirigunt; ex alia parte Frigiones cum Radbode duce consurgunt. Carlus quoque super ipsos Frigiones inruit, ibique maximum dispendium de sodalibus suis perpessus est, atque per fugam delapsus, abscessit. Succedente igitur tempore, iterum ipse Chilpericus cum Ragamfredo, hoste commoto, Ardinna silva ingressus, usque Renum fluvium vel Colonia civitate pervenerunt, vastantes terram. Thesauro multo a Plectrude matrona accepto, reversus est; sed in loco quidem Amblava maximum, Carlo in eos inruente, perpessi sunt dispendium.

52 ダゴベルトの死，キルペリックの即位，そしてカールがラドボドと戦ったことについて。

時が過ぎて，ダゴベルト王が病にかかり亡くなった(1)。彼は5年の間統治した。そこでフランク人たちは，以前聖職者であったダニエルと呼ばれた人物を，頭髪が長くなるのを待って王位に即け，彼をキルペリックと名づけた(2)。そのころ彼らはまたしても軍

隊を召集してカールに対してマース川まで進撃した[3]。その向こう側では，フリジア人がラドボド公に率いられて蜂起した[4]。そこでカールはフリジア人に向かって進撃したが，彼は大量の部下たちを失い逃げのびて撤退した。その後，キルペリックは軍隊を動員してラガンフレドとともにアルデンヌの森に入り，ライン川のほとりまでやって来てケルンを侵攻し，その地を荒らしまわった。キルペリックはプレクトルド夫人から多くの財宝を受け取って帰還したが，アンブレーヴと呼ばれる地[5]でカールが彼らに襲いかかり，彼らは甚大な被害を被った[6]。

（1）　ダゴベルト3世（715年没）。
（2）　キルペリック2世：ネウストリア王（位715–721年）。ダニエルはサン・ドニ修道院に送り込まれていた修道士であった。vid. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 26. P. Riché, *op. cit.*, p. 98.
（3）　この「彼ら」とはネウストリア人を指す。
（4）　716年。第49章訳註(6)および第51章訳註(5)参照。
（5）　Dép. Liège, Ar. Verviers, Ct. St. Vith.
（6）　716年。

53　Quod Carlus pugnam gessit contra Chilperico et Ragamfredo in loco nuncupante Vinciaco, eosque devictos atque fugatos, omnem regnum Francorum in sua redigit potestate.

Eo itidem tempore predictus vir Carlus, exercitu commoto, iterum contra Chilpericum vel Ragamfredo consurgens. Contra quem illi hostem collegunt, bellum preparantes accelerant; sed Carlus pacem fieri postolat. Illisque contradicentibus, ad proelium egressi sunt in loco nuncupante Vinciaco, dominica die inluciscente, 12. Kal. April. in quadragensimo. Illis quidem fortiter bellantibus, Chilpericus cum Ragamfredo terga vertit. Carlus victor extitit. Regiones illas vastatas atque captivatas, itemque cum multa preda in Auster reversus, Colonia civitate veniens, ibique seditione intulit. Cum Plectrude matrona disceptavit et thesauros patris sui sagaciter recepit regemque sibi statuit Chlotharium nomine. Chilpericus itaque vel Ragamfredus Eudonem ducem expetunt in auxilio. Qui movens exercitum, contra Carlum perrexit. At ille constanter ei occurrit intrepidus; sed Eudo fugiens, Parisius civitate regressus, Chilpericum cum thesauris regalibus sublatum, ultra Ligere recessit. Carlus eum persecutus, non repperit. Chlotharius quidem memoratus rex eo anno obiit, Carlusque anno insecuto legationem ad Eudonem dirigens amicitiasque cum eo faciens. Ille vero Chilperico rege cum multis muneribus reddidit, sed non diu in regno resedit. Mortuus quidem est post haec, Noviomo civitate sepultus; regnavit autem annis 5 et dimidio. Franci vero Theudericum, Cala monasterio enutritum, filium Dagoberto iunioris, regem super se statuunt, qui nunc anno sexto in regno subsistit.

53　カールがキルペリックおよびラガンフレドに対して戦いを仕かけた。ヴィンシーと呼ばれる地で彼らは敗れて逃走し，カールはフランク王国全体を支配下においた。

このころ，上記の勇士カールは軍隊を召集して再びキルペリックとラガンフレドに対して蜂起した。彼らの方も軍を集めて急ぎ戦いに備えた。しかし，カールは和平の締結を求めた。彼らがそれを拒否すると，四旬節の日曜日，4月の12日前[1]の早朝にヴィンシーと呼ばれる地[2]で戦いが始まった。キルペリックとラガンフレドは勇敢に戦ったが敗走した。カールは勝利を収めた。彼はその地方を荒し回り略奪したあと，多くの戦利品をもってアウストラシアに戻り，ケルンにやって来ると反乱を引き起こした。彼はプレクトルド夫人と争い，素早く彼の父の財宝を奪い取り，クロタールという名の王を自ら擁立した[3]。それからキルペリックとラガンフレドはエウド公[4]に支援を要請した。彼は軍隊を動員してカールに向かって進軍した。しかしカールは恐れず，彼に対して勇ましく立ち向かった。結局，エウドは退却しパリの町に戻った。そして彼はキルペリックを連れて，王家の財宝をもって，ロワール川の彼方に撤退した。カールは彼を追撃したが，捕らえることはできなかった。ところで，この年，上記のクロタール王が亡くなった[5]。翌年，カールはエウドに使者を送り，彼と友好関係を結んだ。そこでエウドは多くの贈物をもたせてキルペリック王を送り返した[6]。しかし，この王は長くは王位にとどまらなかった。彼はまもなく他界し[7]，ノワイヨンの町[8]に埋葬された。彼は5年半の間統治した。そこでフランク人たちはシェルの修道院[9]で養育されていた，ダゴベルト3世[10]の息子であるテウデリックを王として即位させた[11]。この王はいま彼の治世の6年目にあたる[12]。

（1）　717年3月21日。vid. H. Haupter, *op. cit.*, p. 377. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 95, n. 78.

（2）　ヴィンシー・スュル・レスコ (Vinchy sur l'Escaut), Dép. Nord, Ar. Cambrai.

（3）　クロタール4世：アウストラシア王（位716/7/8–718/9年）。この王の在位期間と素性は明確でない。彼はテウデリック3世の息子と推測される。しかし，彼の息子キルデベルト3世の息子の可能性もある。vid. H. Haupter, *op. cit.*, p. 378, n. 86. R. A. Gerberding, *op. cit.*, pp. 140–145. P. Fouracre et al., *op. cit.*, p. 95, n. 80. J. Morby, *op. cit.*, p. 61. P. Riché, *op. cit.*, p. 105. R. Kaiser, *op. cit.*, pp. 138–139.

（4）　アキタニアの支配者 (dux)。アキタニアは7世紀半ば以来，自立的傾向にあった。vid. S. Lebecq, *op. cit.*, pp. 182–183.

（5）　718/9年。

（6）　メロヴィング時代における軍隊の召集が「王」の存在や王家の「財宝」と関わっていたことについては，第45章訳注(13)参照。

（7）　721年。

（8）　Dép. Oise, Ar. Compiègne.

（9）　Dép. Seine-et-Marne, Ar. Meaux, Ct. Lagny.

（10）　ここで記載される Dagobertus iunior はダゴベルト2世（位676–679年）ではなく，ダゴベルト3世を指す。第50章訳註(3)参照。

(11)　テウデリック４世（位721–737年）。
(12)　727年。